

発刊に寄せて

元 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
障害者スポーツ・プロジェクト アドバイザー
河合 純一

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団の障害者スポーツ・プロジェクトにおきまして、これまでパラアスリート 100 名からのインタビュー調査を取りまとめ、ここに研究成果を発刊されますことを心よりお慶び申し上げます。

2025 年 9 月まで、私も本プロジェクトのアドバイザーとして 3 年半ほど関わらせていただきました。献身的な事務局のサポートの下、藤田先生をはじめとして 3 名の先生方に御尽力いただき、世界的にも稀な研究成果としてまとまったと考えています。

パラスポーツ全般の調査・研究においてよく言われることに、「障害が多様であり、個別性が高いため、n 数を集めることや研究としての質を担保することが難しい」というものがあります。

そのような中、長い年月をかけて積み上げてこられた本インタビュー調査は、障害、競技歴、性別、競技などを広く網羅したものとなりました。そこから見えてきた研究成果は、今後の障害のある方々、とりわけ子供たちに多くの示唆を与えるものとなったと感じています。

本研究成果が一人でも多くのパラスポーツ関係者、特に指導者の方々に届き、これからの活動に生かしていただけるものになれば幸いです。私も一人のパラリンピアンとして、本研究に基づく教育プログラムの開発等にしっかりと取り組んでいければと思っています。

スポーツ基本法が 14 年ぶりに改正され、スポーツ庁が新たなスポーツ基本計画(第 4 期)の策定に向けて動き出すタイミングでの発刊となります。スポーツから誰一人取り残されることなく、誰もが自分らしく生きられる社会を目指して、私自身、一つでも多くの課題解決方策が具現化できるよう引き続き取り組んでまいります。

本研究に際しまして、100 名のインタビューに御協力いただいたパラア

スリートに感謝を申し上げ、発刊に寄せての言葉とさせていただきます。

2025 年 12 月吉日

はじめに

ヤマハ発動機スポーツ振興財団、障害者スポーツ研究プロジェクトは2012年から活動を開始した。「スポーツと深い関わりのある人間科学、スポーツ医学等の学術及び科学技術の振興を図り、併せて我が国におけるスポーツの普及・振興とスポーツ文化の振興・発展を図ることを目的」とした当財団の目的と、チャレンジする人々を応援するという財団のスピリットに沿う形で立ち上がったプロジェクトである。障害のある人のスポーツの普及・振興に寄与するとともに客観的データに乏しい後発の研究分野において後の研究の基礎となるデータを収集し、残すというまさにチャレンジングな研究プロジェクトである。

本プロジェクトでは2013年にパラリンピアン、そして2015年にはジャパンパラ(陸上競技と水泳)参加者に対してアンケート調査を実施した。その結果パラリンピアン調査では後天的に障害を持った人が約7割、これらの選手は受傷後スポーツを始めるまでに10年以上かかっていたこと、公共の一般のスポーツ施設で練習している人が3割と多いこと、スポーツ実施に当たっては、友人やトップ選手、監督、コーチの影響を受けている人が多いことなどが明らかになった。ジャパンパラに参加した選手の調査では先天的な障害者が過半数で、スポーツを始めたきっかけとしては家族の勧めが約3割と多いことなどがわかった。

これらの調査から障害のあるスポーツ選手のスポーツキャリアの特徴をある程度知ることができた。しかしながら、選手一人ひとりに目を向けると年齢や性別はもとより、障害の種類や程度、先天的障害か後天的障害か、生まれ育った場所や時代背景などが非常に多様である。このように多種多様な選手たちはどのようなきっかけや支援があってスポーツをすることが可能となったのか？どのような施策が障害者のスポーツ実施に有効なのか？をより具体的に知ることで、障害者のスポーツ実施に結び付けたいという動機から2019年に本調査を開始した。そして2024年度までに合計100人の選手のインタビュー調査を実施することができた。

まずは1時間～2時間のインタビュー調査に快く対応して下さった選

手の皆さんに感謝したい。ほぼすべての選手の皆さんは「オフレコ」なしで、生まれてこれまでの人生、スポーツを始めるようになった契機や周りの支援のこと、今後のスポーツの取り組みなどを丁寧に答えてくれた。先天的な障害があっても、子どものころから体を動かすことが好きでそのまま競技選手になった人。子どものころから、障害がありながら障害のない人と常に一緒にスポーツをし、後になって自分がパラスポーツの大会に出られることを知った人。事故で障害を持っても好きだったスポーツを続けたいという思いから自ら情報を集め、パラスポーツに親しむようになった人。偶然テレビでパラスポーツを見て関心を持った人。足の切断時に、スポーツがやりやすいよう切断部位を医師と相談したことが功を奏した人など。100人のインタビューでは100通りのスポーツとの出会い方や周りの支援や応援が語られた。可能であれば選手の皆さんが語ってくれた言葉をそのまますべて掲載したいところであるが、おそらく3000ページ近い報告書になるであろう。

今回の本報告ではスポーツ実施のための7つの視点と12のスポーツキャリアパターン(1章)、スポーツに対する関心の有無(2章)、スポーツキャリアパターンにみるスポーツ開始時のきっかけと継続(3章)、競技活動継続時の経済的支援・社会的支援(4章)、モチベーション(5章)、障害者のスポーツを取り巻く社会的環境の変化(6章)、本調査のまとめといくつかの提言(7章)について報告する。できるだけ各選手が多様であることを損なわないように執筆したつもりであるが、抜け落ちてしまった部分があまりにも多いことも事実である。2019年から2024年までの本研究プロジェクトの報告書には、やや詳しく選手のインタビュー結果が掲載されているので合わせて読んでいただくと幸いである。

お忙しい中インタビューに応じてくださった選手の皆さんに再度心からお礼申し上げる。これらの語りは読むだけでも楽しいし、障害のある人たちのスポーツキャリアがいかにも多様かということを教えてくれている。そして何より今後の障害者スポーツの施策を考える時の貴重な基礎資料となるに違いない。もっと多くの障害のある多くの人たちが日常的に普通のこととしてスポーツ活動に携われるようになることを願っている。そして、最後に100人もの選手のインタビューの日程や場所の調整、承諾書の

やり取り等をしてくれた本財団職員の皆さまにも感謝したい。間違いなく本報告は職員の皆さまと研究員の共同作品です。皆さまありがとうございました。

(藤田紀昭)

■目次

発刊によせて	i
はじめに	iii
序章 研究概要	1
1. キャリア調査の背景・目的	2
2. 調査概要・インタビュー対象者の属性	4
第1章 7つの視点と12のスポーツキャリアパターン	7
1. 障害のある人のスポーツ活動のための7つの視点(条件)	8
2. 12のスポーツキャリアパターンについて	12
第2章 スポーツに対する関心の有無	27
1. 傾向	28
2. スポーツに関心がある人、 好きだった人、嫌いではなかった人の事例	28
3. スポーツに関心がなかった人、嫌いだった人の事例	32
4. まとめ	35
第3章 スポーツキャリアパターンにみる スポーツ開始時のきっかけと継続	37
1. 情報提供者	38
2. 開始時重要他者	42
3. 開始場所	47
4. 継続時重要他者	51
5. クロス集計	56
6. まとめと考察	65

第4章 競技活動継続時の経済的支援・社会的支援	69
1. 報告概要	70
2. 競技活動継続時の支援の有無・支援元	70
3. 雇用先からの支援	71
4. 競技継続における「選手雇用」の実態	74
5. 障害種別にみた雇用先支援の実態	77
6. 自治体からの支援	80
7. まとめ	84
第5章 モチベーション	87
1. 傾向	88
2. 前章までとの関連性	88
3. 事例	89
4. まとめと提言	98
第6章 障害者のスポーツを取り巻く社会的環境の変化	101
第7章 本調査のまとめといくつかの提言	111
1. スポーツを始める前の状況(スポーツへの関心の有無)	112
2. 障害者スポーツに関する情報を得ている	113
3. 障害者スポーツの場へのファーストアクセスがある	115
4. 障害者スポーツを継続するための受け皿がある	117
5. 継続的なアクセス方法の確保	118
6. 社会的支援・経済的支援	119
7. モチベーションの維持	120
おわりに	122
執筆者紹介	124
附録	
キャリア調査インタビュー一覧	127
書籍および過去の報告書データ	163

序章.

研究概要

1. キャリア調査の背景・目的

障害者スポーツ選手のキャリアに関する実態把握を目的として、本プロジェクトでは、2013 年度に「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」、2015 年度に「障害者アスリートのスポーツキャリアに関する調査」を実施してきた。両調査の概要は図表序-1・2 のとおりである。

図表序-1 2013 年度キャリア調査概要

「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」 (2013 年度実施)

【調査対象・回収数】

2004 年アテネ、2006 年トリノ、2008 年北京、2010 年バンクーバー、2012 年のロンドンパラリンピックに出場した競技者 321 名(回答者数:200 名/回収率:62.3%)

【調査結果要約】

- ・回答者の 73.5%が「中途障害」で、障害発症平均年齢は 18.8 歳、パラリンピック出場競技の開始平均年齢は 23.3 歳であった。
- ・競技を始めたきっかけは、「友人や知人のすすめ」(34.0%)が最も多く、「学校の授業やクラブ活動」(14.5%)、「家族のすすめ」(11.0%)が上位。
- ・練習頻度は「週に4～5回程度」(38.0%)が最も高く、「週に6～7回程度」(30.0%)、「週に2～3回程度」(26.5%)と続く。
- ・練習施設は「公共施設」(30.5%)、「障害者向け公共施設」(28.0%)の利用率が高く、「民間施設」(12.5%)と「学校施設」(12.0%)が続く。
- ・パラリンピック出場時の競技サポートを 75.0%が受けており、パラリンピック出場当時の職業は「会社員」(40.5%)、「公務員」(11.5%)、「学生・大学院生」(11.0%)の順であった。

図表序-2 2015 年度キャリア調査概要

「障害者アスリートのスポーツキャリアに関する調査」 (2015 年度実施)

【調査対象・回収数】

2015 ジャパンパラ水泳競技大会もしくは陸上競技大会にエントリーした競技者 577 名(回答者数:218 名/回収率:37.8%)

【調査結果要約】

- ・回答者の 52.3%が「先天性障害」で、「中途障害」は 35.8%、「無回答」は 11.9%であった。中途障害の受傷・発症時の平均年齢は 18.0 歳であった。
- ・学校体育とのかかわり方について「ほぼ参加した」が最も多く、小学校では 117 人(68.4%)、中学校では 124 人(68.1%)、高等学校では 140 人(74.5%)、大学では 17 人(47.2%)であった。
- ・競技を始めたきっかけは、「家族のすすめ」(33.9%)が最も多く、「学校の授業やクラブ活動」(27.5%)、「友達や知人のすすめ」(23.4%)が上位。
- ・練習頻度については「週に 2～3 回程度」(22.5%)が最も多く、「週に 4～5 回程度」(20.6%)、「週に 1 回程度」(13.8%)、「2～3 ヶ月に 1 回以下」(12.8%)と続く。
- ・出場経験のある国際大会は、「パラリンピック・デフリンピック」が 22 人(10.1%)、「世界選手権」が 32 人(14.7%)、「地域別国際大会」が 39 人(17.9%)、「それ以外の国際大会」が 53 人(24.3%)であり、国際大会未経験者は 115 人(52.8%)であった。

以上の調査は、パラリンピアンおよび国内選手のキャリア形成や競技活動の現状把握に有益なものであるが、選手個々のキャリアは、年齢、性別、障害種や程度、発生時期、学齢期の体育・運動経験、活動地域や人的・経済的支援の状況等、多種多様な条件によって規定される個性の高いものであり、量的調査のみでは選手個々のキャリアを詳細に把握

することが困難であった。

そこで、多様な競技者に対する支援方策や各種施策を検討するための基礎資料を得ることを目的として、2019 年度から 2024 年度にかけて選手一人ひとりの個人史やスポーツキャリアに関するインタビュー調査を実施した。

2. 調査概要・インタビュー対象者の属性

本調査は、合計 100 名の選手に協力いただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ 1 時間～2 時間程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等を説明し、同意を得た上で調査を実施した。また、倫理的配慮として、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11 および 22-001-01)を受けて調査を実施した。個人情報保護の観点から、対象者は本書籍において名前ではなく「識別番号」として表記した。この「識別番号」は、巻末附録のキャリア調査インタビュー一覧内「通し番号」及び「識別記号」の番号と同じ調査対象者である。番号は、インタビューを実施した順番である。なお、インタビュー調査はプロジェクトメンバー4 名を中心に実施し、日本福祉大学の安藤佳代子准教授ならびに兒玉友准教授の協力を得た。

主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。また、インタビュー対象者の属性は図表序-3 のとおりである。

図表序-3 インタビュー対象者の属性

【障害発生年齢】

※0～5歳:51名/6～20歳:30名/21歳～:19名

※本調査研究では0～5歳で障害が発生した場合を先天的障害者としている。

【障害種】

脊髄損傷・二分脊椎:20名/下肢切断・下肢機能障害:18名/
上肢切断・上肢機能障害:8名/脳性麻痺:10名/
視覚障害:27名/聴覚障害:8名/その他:9名

【所属・雇用形態等(調査時)】

一般雇用:45名/※選手(アスリート)雇用:36名/大学生:7名/
/その他:12名

※選手(アスリート)雇用については、以降「選手雇用」と表記する。

【競技レベル(調査時)】

国内大会出場:17名/国際大会出場:9名/

国際大会入賞:32名/パラリンピック出場:8名/

パラリンピック入賞:20名/パラリンピックメダリスト:14名

性別については、男性が6割強を占めており、平均年齢は37歳で20代から60代まで幅広い年齢の対象者にインタビューを実施した。障害発生年齢についてみていくと、「0歳から5歳」が51名、それ以降の発生が49名となっており、先天的もしくは幼少期に発症した対象者と後天障害に該当する対象者がほぼ半数ずつとなっている。障害種については、脊髄損傷・切断・脳性麻痺等の肢体不自由の対象者が56名、視覚障害、聴覚障害等の対象者が44名となっている。

雇用形態については、一般雇用・選手雇用の選手が81名、大学生・その他の選手が19名となっている。また、競技レベルについては、競技別国際大会入賞、パラリンピック出場以上の戦績をもつ選手が74名となっており、本調査の対象者の多くは高い競技歴を有していると指摘できる。

(序章担当:河西正博)